

始まりのブザーが鳴るまで問題冊子、解答用紙に手を触れずに、

左記の注意事項に目を通しておくこと。

- ◎ 問題用紙は1ページから14ページまでであるので、始まりのブザーが鳴ったらすぐに確認すること。
- ◎ 最初に記名をしてから問題を解くこと。
- ◎ 解答はすべて別紙の解答用紙に記入すること。
- ◎ とじてある問題用紙をばらにしたり、一部を切り取ったりしないこと。
- ◎ 終了のブザーが鳴ったら筆記用具を置くこと。
- ◎ 問題冊子は持ち帰ってもかまわない。

◎選択肢のある設問は、最も適当なものを選んでその番号を記すこと。

◎字数指定のある設問は、句読点や記号も一字とする。

【一】次の文章を読み、後の問に答えよ。

一九二一（明治四四）年、漱石が四四歳の時に堺で講演した「中身と形式」という講演録があるが、ここで彼は次のようなことをいう。

ドイツにオイケンという有名な哲学者がいて、オイケンの本を読んでもみると、こんなことをいっている。人々は一方で自由が大事だという、他方で社会の規律や秩序が大事だという。これはおかしいからどちらかにしないといけない、とオイケンはいつている。しかし漱石はオイケンのこのようないい方はおかしいという。われわれの日常生活の中で矛盾することはいくらでもあるではないか。自由は大事だけれども、秩序も大事だったりすることは当たり前であろう。朝から晩まで自由に暮らせると思う方がおかしい。

自由の時間は大事だが、同時に規律も大事である。例えば、会社に行つて会社で働く時は自由ではいけない。九時なら九時に会社しないといけない。全員が好きなことをしては会社は機能せず、上司の命令をある程度聞いて規律を守らなくてはならない。しかし会社から出て帰宅後や、友達と遊ぶ時に規律が大事かという、そうではない。規律も自由も共に必要だ。かくて矛盾は人間にはつきもので、矛盾する両者とも大事なことは当たり前である。どうしてオイケンのような学者が、これは矛盾するからどちらかにしないとけないなどというバカなことをいつているのか、と彼は書いている。その通りだ。ここで漱石は、頭の中だけで合理的に物事を考えようとする学者・知識人の論理など全然当てにならないといっているのだ。

学者・知識人は、頭の中で考えた理屈しかいわない、頭の中では「AとBは矛盾するから、Aを取るかBを取るか、どちらかにしろ」という。論理における排中律である。しかし実生活で排中律は成り立たない。生活から出発すれば、いくらでも矛盾することがあって、矛盾の中でこそわれわれは生きており、それを勝手にどちらかに片づけることなどできない。矛盾するあれこれを何とかうまく調和させ

ながらやっついていく。それこそが実生活の常識、実生活での人間の知恵だと彼はいう。こういうところに^②漱石の基本的なものの見方、生きる姿勢が表されており、彼が東京帝大の学者の地位を捨てて作家になった理由もこの矛盾に満ちた具体的な生活にこそ人間の真実が現われると考えたからであろう。

例えば、傍観者の態度に甘んずる学者が、部外から観察してある法則や規則を唱え、一つの形式を打ち立てる。こういう形式をゴシヨウ大事にして、形式ですべてを割り切ろうとしたらとんでもないことになるであろう。われわれの生活の具体的な様相こそが、事実の主たる内容であり、その具体的な生活の内容から形がでてくる。^③まずは内容があつて、その内容に合わせた形式を作らないといけない、と漱石はいう。

考えてみれば当然のことで、形式や形のためにわれわれの生活があるのではなく、その逆である。われわれの生活はそのツド、そのツド、思いもよらないことが生じたり、とても合理性で割り切れないことがいくらかでもある。そこで、むしろわれわれの**b** 実際生活こそが、学者的な傍観者の態度による観察一方から形式を調える方向とは異なつた形式を生み出すのだ。われわれの日常生活の経験の方が大事であつて、学者が外から観察してあれこれいうことは信用できない、というのだ。

ここには^④二重の意味がある。つまり、一般的に庶民といわれる、特別な専門的な知識を持たず生活している市井の人々と、多かれ少なかれ理論や学説や学問を準拠にして、頭の中が学問的な思考でいっぱいになっている、その学問的な思考から実生活を見ようとする知識人。この二つの生活態度の間に矛盾、対立がある。ところが近代社会はもっぱら学者が頭の中で考えてきた形を無理やり実生活に押しつけようとする。だが、庶民はそれに納得できない。納得できないにもかかわらず、学者、専門家、知識人に反論できないために、いつのまにかズルズル引きずられている。しかし、そうなる日常生活の中でさらに矛盾がでてくる。ここに、知識層と庶民の間に大きな分裂が生じてくる。庶民は知識層に反論はできないが、内心では腹立たしき、苛立ちがある。これが一つ。

しかしそこに、第二に、さらにやっかいな事情が加わる。それは、知識人が頭の中で考える形というのは、^⑤概して西洋から導入されたものであり、西洋的な学問だということだ。西洋的な学問は基本的に合理主義に立ち、先ほどのオイケンのように、AとBが矛盾すればAを取るかBを取るかはつきりしろ、という。そういう思考習慣の中ででき上がった学問を日本に持ち込み、それを日本の明治の形にしてしまおうとする。それこそが新しい形だ、それが近代だとして押しつけようとしている。日本の「近代」は外からの「形」をあてはめ

ることであった。これで普通の人の日常がうまくいくはずがない。そういうことに対して漱石は苛立っている。

この漱石の苛立ちを読むと、私は、実はここ二〇年くらいの日本の構造改革のことを考えてしまう。これはまさに今日の話である。経済構造改革や政治改革は一九九〇年代の半ばに始まったが、それはアメリカ経済学、アメリカ政治学の影響を強く受けていた。アメリカ政治学は、民主主義の普遍性を強く唱え、民意が政治反映されるべきだといひ、この意味での民主主義を世界中で実現すべしという。これがアメリカ政治学の基本的なスタンスであった。経済学の方は、市場は徹底して自由競争でなければならぬと主張し、これがアメリカ経済学の基本的な考え方であった。その考え方を、日本のジャーナリストや評論家、学者、さらにはカンリョウまでもが九〇年代の初めに日本に持ち込んできて、日本社会のバツポンの改革、つまり構造改革を唱えた。

しかし日本の実態を見るとそう簡単にはいかない。日本には日本の歴史の中で作りだされてきた制度や習慣があつて、それをいきなりアメリカ型の自由競争に変えるべきだと唱えても無理である。また、政治改革によつて、二大政党制をやれといつても無理がある。市場経済のあり方も、民主政治のあり方も、日本とアメリカではかなり違つている。政権選択などは日本の政治にどうも合わない。経済構造改革の方も、いわゆる日本的経営方式をやめてアメリカ型の自由競争をやれといつてもそれほど簡単には変わらない。にもかかわらず、知識層は「改革」の大合唱になつた。「改革」は不合理なものを改め、合理的なものにせよという。しかし日本経済はよくならないし、

A 日本型経営システムは崩壊し、 B アメリカ型の自由競争にもならない。

こういうことがこの二〇、三〇年間ほど続いており、この現実を見ると、まさに漱石がいうように、知識人が外国から出来上つた形だけ持つてきて、形を日本に無理やりあてはめようとするが、それではうまくいかない、という実例のように思える。漱石はそういうことを非常に早い段階から論じている。知識人は頭の中で考えて合理的にやろうとするが、実生活の中にはいろいろ矛盾することがあつて、われわれはその矛盾をなんとか調整しながらやつている。それが実生活であり、具体的な経験である。「形式」と「中身」といつてもよいし、「理論」と「現実」といつてもよいし、「抽象」と「具体」といつてもよいが、その間の緊張をわれわれは知らなければならぬ、ということだろう。

問一 — ①と同じ意味の慣用句になるように、次の に入ることばをひらがな四字で答えよ。

「」の合わない「こと」

問二 — ②とはどのようなものか。

- 1 日々の生活のなかで生じた問題に対し合理的に向き合おうとする姿に、人間の本来のあり方を見て取ろうとするもの
- 2 日々の生活のなかで生じた合理的には解決できない出来事に対応していく姿に、人間らしさを見て取ろうとするもの
- 3 日々の生活のなかで生じた調和を合理的に説明することは不可能だとする姿に、人間の本性を見て取ろうとするもの
- 4 日々の生活のなかで生じたできことを合理的に解決しようとしぬ姿に、人間としての限界を見て取ろうとするもの

問三 — ③とはどのようなことか。

- 1 日常生活の経験をもとにして法則や規則は考えられるべきだということ
- 2 日常生活の経験は法則や規則によって合理性を評価するべきだということ
- 3 法則や規則に適^{かな}った合理的な日常生活の経験を重んじるべきだということ
- 4 法則や規則を作るために日常生活の経験は見直されるべきだということ

問四 — ④とはどのようなことか。

- 1 庶民は専門的な知識をまったく持たない無知な存在である一方で、知識人たちもまた学問ばかりで実生活に疎い存在であるということ
- 2 自らの学問を権威あるものと考え、知識人の姿勢にも元々無理があるが、庶民は知識人に逆らえないということ
- 3 日本は知識人が庶民を啓蒙することで近代化したものの、その代償として知識人に対する庶民の不信感を招く結果になったということ
- 4 知識人と庶民との間には大きな分裂があるが、それに加えて日本と西洋との間にも少なからず隔たりがあるということ

問五 — ⑤の意味はどれか。

- 1 大まかにいって
- 2 客観的にみると
- 3 言うまでもなく
- 4 結局のところ

問六 — ⑥はどのような例としてあげられているか。

- 1 民意に配慮しない学問
- 2 歴史に基づかない学問
- 3 秩序を重んじない学問
- 4 曖昧さを含まない学問

問七 — ⑦の「緊張」とはどのような状態か。

- 1 生活に追いつめられている状態
- 2 葛藤をかかえている状態
- 3 先入観にとらわれている状態
- 4 不安に駆られている状態

問八

A	・	B
---	---	---

 に入る語の組み合わせとしてふさわしいものはどれか。

- 1 A にもかわからず B だからこそ
- 2 A かといって B にもかわからず
- 3 A それどころか B かといって
- 4 A だからこそ B それどころか

問九 本文を内容上、前半と後半に分けた場合、後半はどこから始まるか。初めの五字を抜き出せ。

問十 夏目漱石の作品の冒頭はどれか。

- 1 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。
- 2 高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。
- 3 禅智内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない。
- 4 親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。

問十一 〓 a 〓 d のカタカナを漢字に直せ。

【二】次の文章を読み、後の問に答えよ。

① 旅に出るのは自分自身である。しかし、旅の自分は日常の、茶の間の自分とは違う。

旅の道中では、からだどころとたましいは別々に働かない。あるときは自分が目だけになってしまふ。あるときは手だけ、足だけになる。② 泥のように眠るなどというから、眠っているときの自分は泥なのかもしれない。ヒマラヤ山脈のような気高い山々の稜線を目で追っているときは、目で見ているその視線の動きが自分の感動のキフク^aになる。目がころになってしまふ。全身これ全心になってしまふ。そのとき、キラキラと輝いている雪山の光は、ひよつとすると魂なのかもしれない。それが自分の魂であることに間違はないが、自分だけの魂なのか、もっと③ な、生きとし生けるものの魂なのかわからない。しかし、それはからだという質料、あるいは機械ではなく、こころという動く形でもなく、たましいとしか呼びようのない生命エネルギーの根拠地のように思われるのである。

旅のなかで、そういう身体感覚が身につくのである。宇宙的な身体感覚といつてもよい。

五体投地をくりかえしながら、何カ月、何年もかかるカイラス山巡礼に出発する。かれらにとっては一日に何回か口に押し込んでいのちをつなぐツアンパ（青稞麦の炒り粉をこねたもの）と、乾いた土のような麦こがしとそれらの容れものがからだで、尺取り虫のように一寸きざみに進んでゆく動作のかたち^cがこころ、そして目的地にそびえる、あるいはイメージのなかにかがやく聖なる山、カイラス山がたましいなのであった。

旅のなかで、からだ・こころ・たましいはこういうふうに感じられるものではなからうか。そしてこの身体観の方が、常識としての、眠っているように平和な、日常のそれよりも本質的なものではないだろうか。

(A) 旅だけが自分の本質をロテイ^bするために不可欠なものだというわけではない。

私はいま縁^eにすわってわが家の小園を見ている。今日は雨だ。(B) 雨にぬれた新緑の木々もなかなかよい。そうだ、この風景を絵に描くことにしよう。そう思って、頭のなかにキャンパスをひろげ、手に持った見えない絵筆を動かす。自分の全身が絵筆の動きになつて木々の輪郭をたどる。虚空^cに図画^dするのだ。

泰山木のかたち、その楕円形の、さきの尖^dった葉をこう描く。カエデの葉のギザギザをこう描き、あの木の枝ぶりはもうすこし面白く

変形してみよう。折り目のいっばいつまっているマンサクの葉っぱはとても面白い。あの葉っぱを拡大して描いてみよう。白木蓮はまだ花が咲いていない。しばらく待って、咲いた花の位置を工夫してみようか。花はまだだけれども、不思議なことに、頭のなかには

⑤。それを描いてみようか。

葉っぱのかたち、木々の枝ぶり、見える花と見えない花がそこにあらわれて、次から次に絵筆の動きをさそう。私は草木の魂にさそわれるように想像力のなかの画面をつくりあげる。

このとき、絵を描いている自分のからだは——やれやれ疲れた、お茶でも飲もうかと立ちあがった時を別として——自然の万物のなか、無意識のなかにある。気づかない。座布団や廊下の床板やその下にひろがる土地と一体である。筆の動き、手の動きは私のこのころの軌跡、その表現である。たましいは草木のかたち、花や葉のかたちと大空——あるいは宇宙——との接点に明滅している。それは、そのとき外部にあって、呼べば答えてくれるたましいである。

からだは土、こころは形、たましいは自分と大空との接点にあるといったらよいだろうか。いや、大空そのものだろうか。

⤴ 自然が人間に何事かをつたえる。それを人間がうけとめる。ある意味でコミュニケーションのしくみを考えているわけであるが、一般にコミュニケーションというと、人間中心の立場に立って、集団のなかの個と個、脳と脳の回路をどう結びつけるかが問題である。言葉によるコミュニケーションを指すことになる。

そういうものから離れて、人間の群れ中心の戦略的コミュニケーションではなく、自然中心のコミュニケーションを考える。自然が人間に送り出している信号と、その受容のしくみを考えるのである。言葉ではなくて「暗黙知」のなかの相互理解といってもよい。歩く、さわる。見える、きこえる、匂う。情報ではなくて、存在の本質の交換。

二本の若木が並び立っているとしよう。^⑥次第に生長して枝を張り、葉を茂らせ、花を咲かせる。その花と花とを媒介して昆虫が飛びかき、受粉させ、実をみのらせる。花と実のコミュニケーションで、ジュウライ、われわれが学んできたのはこれである。ところが二本の木を共にささえている土壌がある。特別に水や肥料の心配をしなくても——自然のまま——二本の木は並んで生きている。生き生きと天地のあいだに位置をしめている。

岩むろの 田中に立てる ひとつ松あはれ 一つ松 濡れつつ立てり 笠かさましを 一つ松あはれ (『良寛歌集』)

この歌になると、一つ松の姿からつたわってくるものが良寛にとどき、その良寛が今度は松に笠をきせ、人間に仕立てて、共感している。ともに同じ大地に生きるものとしての共感である。一つ松だから木と良寛が兄弟になった。二本松だったら、木と木が兄弟となり姉妹となつて交流するだろう。地を通しての交感。

切り花と切り花が、同じガラス瓶の水を共有する。これが華道のゴクイではないかと私は思っている。

〔C〕がからだで〔D〕がこころ。たましいは〔E〕。

ここで、私のいたかったことは、自分というものをからだ・こころ・たましいとして表現したばあいには、そのあらわれかたが二様だということである。その一は、日常的・常識的なそれ、人間機械論に帰着する——したがってたましいは認めず、こころは脳に帰着する——ときのそれであり、その二は、いわば非日常の、旅のなかの、身体が湧き立つようなときのそれである。コスミック・マンの、つまり、この地球はもちろん、月や星や神々や地獄を内包するからだ、たましいを含むからだである。

その上で、私は後者の方を人間の原型とするのである。

自然と交感しながら旅していると、自然のなかにこういう構造の自分があらわれていることに気づくのである。▽

(岩田慶治『アニメズム時代』)

問一 —— ①の「旅」はどのようなものか。次の に入る本文中の五字を の中から抜き出して記せ。

自分自身の「たましい」が するもの

問二 —— ②はどのようなことのとえか。

- 1 だらしない格好で眠る
- 2 重苦しい気持ちで眠る
- 3 疲れ果てて深々と眠る
- 4 ところかまわず眠る

問三 ③に入るのはどれか。

- 1 有機的
- 2 相対的
- 3 理念的
- 4 普遍的

問四 ④で筆者は「かたち」に何を感じているか。

- 1 いさぎよさ
- 2 したたかさ
- 3 しなやかさ
- 4 ひたむきさ

問五 ⑤に入るのはどれか。

- 1 すでにあの大輪の白い花がポツカリと咲いている
- 2 あの可憐な白い蕾つぼみが今か今かと咲くのを待っている
- 3 もうあのみずみずしい新芽が春の息吹をたたえている
- 4 今にも開花を迎えるべくどこまでも澄んだ青空が広がっている

問六 ⑥が該当するのはどれか。

- 1 戦略的コミュニケーション
- 2 自然中心のコミュニケーション
- 3 「暗黙知」のなかの相互理解
- 4 存在の本質の交換

問七 ⑦からうかがえる心情を二つ選べ。

- 1 焦燥
- 2 悔恨
- 3 慈愛
- 4 歓喜
- 5 諦観
- 6 悲哀

問八 ⑧とはどのようなことか。

- 1 人間の行動のすべてを常識で規定するようになること
- 2 人間の行動のすべてを身体からだの働きとして説明するようになること
- 3 人間の行動のすべてを精密さ、正確さで評価するようになること
- 4 人間の行動のすべてを画一的、等質的なものとしてとらえるようになること

問九 (A)・(B)に入る語の組み合わせはどれか。

1 A たとえば B ところで 2 A もちろん B しかし

3 A さて B つまり 4 A そもそも B だから

問十 [C] [E]に入る語をそれぞれ次の中から選べ。

1 空 2 花 3 土 4 水 5 瓶

問十一 || a f のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

【三】次の文章を読み、後の問に答えよ。

西の京に、富田久内といふものあり。わかきときより、なざけふかく、慈悲あつき心ざしあり。ある日家を出て北野の天神にまうでたり。下向のとき、茶店の床にしりかけ躓しりかけて茶飲みける所へ、十二三ばかりとみゆる小法師来りぬ。容の色青ざめて瘦やせつかれたり。久内とひけるは、「小僧はいづくの人ぞ」といふ。こたへていひけるやう、「それがしは東山辺にあるもの也。今朝よりここかしこ使となりて行きめぐり、まだ何をくはず。師匠坊主の命にしたがふばかり身も心もくるしき事は、①又もあるべからず」といふ。久内聞きて②おほえ、餅買ふてくはせなんどしけり。かの小法師も久内もうちつれて茶店を出て、内野のかたに出る。右近の馬場にして、かの小法師いふやう、「まことは我は人にあらず、火の神の使者として焼亡火事の役にあづかる。君はなざけふかき慈悲者なればかたり侍る。明日は北野・内野・西の京みなことごとく焼きほろぶべし。君が家はやくまじけれども、③私にこれをはからふ事かなはず。はや縄ばり分量の数に入りたり。君はやく家にかへりて財宝・家の具とりのけて他所にうつり給へ」とて、「④我は又跡よりをそくゆかん」とて、うせにけり。久内ふしぎの事に思ひ、いそぎ家にかへり、財宝・家の具どもちはこび他所にうつしければ、人みなあやしみて子細をとふに、更にかたらず。しゐて問ひければ、「かうかうの事」とかたる。これを聞く人あざわらひて、何条きつねにたぶるかされて、あるべくもなき事を聞きてかへり、あはてふためきて家の具を打ちはづし、資財・雑具をとりはこぶ。さだめて普請の料をつみやさんためか」なんどののしりわらひたり。

今年三月の比、西の京の住人等、東の京の住人等と酒麴売買の事につき、座をくみて売りけるを、⑤座をやぶりける故に、公方へうつたへたり。その時の管領畠山入道徳本このうつたへを聞くに、東の京かたに理ありければ、対決及びて西の京の⑥方法度をそむく科におちてまけたり。西の京の酒麴うる奴原やつぼらうらみいきどをり、其外そののあぶれ者どもおほくかたらひ、北野の社にあつまりて入りこもる。管領さまさま申さるるむねありといへども、⑦更に聞き入れず。是非に東の京の酒麴の者共を打ちはたさむとす。是によりて侍所京極なにがしにおほせふくめ、武士をつかはして、かのともがらをからめとりて牢獄にいれんとするに、とらへられじとふせぎたたかひて、文安元年四月十二日、社に火をかけ、自害しけり。折ふし魔風ふきいでて、社頭・僧坊・宝塔・廻廊一時に灰燼くわいじんとなり、余煙民屋にもえつきて、

⑧ ことごとく野原となりぬ。

問一 — ①の意味はどれか。

- 1 二度とあり得ない
- 2 他にあるはずがない
- 3 度々あることではない
- 4 決してあつてはならない

問二 ②に入るのはどれか。

- 1 おそれおほく
- 2 しらじらしく
- 3 かはゆく
- 4 欲ふかく

問三 — ③はどのようなことを言っているのか。

- 1 自分にはあなたを守る力はない
- 2 自分は火の神をだまそうとは思わない
- 3 自分の過ちをただすことにはならない
- 4 自分一人で決めてしまうことはできない

問四 — ④の発言の意図はどれか。

- 1 土地の神を鎮めるため
- 2 逃げる時間を与えるため
- 3 失った財産を取り戻すため
- 4 焼け残りの有無を確認するため

問五 — ⑤とはどのようなことか。

1 金品で買収を図ったこと

2 それまでの慣例を無視したこと

3 神仏との誓約を破ったこと

4 相手に危害を加えたこと

問六 — ⑥とは何のことか。漢字一字で答えよ。

問七 — ⑦とは誰か。

1 京極の何がし

2 あぶれ者

3 管領

4 妖魔

問八 ⑧に入る三字のことばを本文中から抜き出せ。

問九 本文の内容と合うものを二つ選べ。

1 用心を怠っていたため妖魔にだまされた。

2 利害が絡んだために行動に抑制が効かなくなった。

3 酒を飲み過ぎて激しい争いになった。

4 日頃から人に親切にしていたのに不幸な目にあった。

5 人の話を聞き流して取り返しのつかないことになった。